

THE UNIVERSITY OF TOKYO
KASHIWA CAMPUS

東京大学 柏キャンパス — 「知の冒険」を目指して



総長挨拶

柏キャンパスは、21世紀における新たな学問の発展に向け、本郷、駒場に次ぐ東京大学の3つ目の主要キャンパスとして、二十数年間に渡り整備が進められてきたキャンパスです。

東京大学は、明治10年(1877年)以来、伝統的学問分野を深く極めてきた本郷キャンパスと、昭和24年(1949年)以来、複数の学問分野の接点において新たな学際的領域を開拓してきた駒場キャンパスを主要キャンパスとして発展してきました。平成12年(2000年)に学問体系の根本的な組み換えをも視野に入れた学融合を志向する柏キャンパスが3つ目の主要キャンパスとして加わり、東京大学の教育と研究、さらには社会連携や国際連携活動を推進する場となっています。

歴史をたどると、昭和63年(1988年)、当時のキャンパス委員会から新キャンパス候補地として柏市所在の旧米軍通信所跡地が最適である旨の提案がなされ承認されました。その後、平成4年(1992年)、「柏キャンパス計画委員会」が設置され、本郷、駒場の2キャンパスに柏地区を加えた3キャンパスを中核とする三極構造を本学のキャンパス計画の基幹構造として位置づけた、いわゆる三極構造構想が策定されました(東京大学キャンパス計画の概要、同年6月9日評議会承認)。平成8年(1996年)3月には、大蔵省関東財務局から柏通信所跡地約11.6ha(第一期用地)が東京大学に所管換になり、同年11月に柏新キャンパス建設地において「東京大学柏キャンパス起工式」が開催されました。以降、順次、柏キャンパスの土地取得が進められ、平成26年(2014年)には前記

「東京大学キャンパス計画の概要」を発展的に改正した東京大学キャンパス計画大綱(同年3月27日役員会議決)が定められました。その後もこれら一連の計画に沿って整備を進めて参りましたが、今般、令和3年(2021年)3月をもって全36.6haの土地取得を完了しましたことを、関係のみなさまにご報告申し上げます。

この間、多くの部局が他のキャンパスから柏キャンパスに移転、あるいは新設されました。大学院新領域創成科学研究科では「基盤科学」、「生命科学」、「環境学」の3つの分野を中心に、新しい学問領域の創成を目指しています。物性研究所では現代の多様な産業を支える様々な物質を根源から理解するとともに、新しい物質の創成を目指しています。宇宙線研究所では宇宙線の研究を通して宇宙や物質の起源に迫ろうとしています。大気海洋研究所では海洋と大気の基礎的研究を推進するとともに、地球表層圏に関する科学の深化を通じた社会貢献を目指しています。国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構では数学と物理学、天文学の連携により宇宙の根本的な謎の解明に挑んでいます。

ここではすべてを紹介しきれませんが、このほかにも空間情報科学研究センター、環境安全研究センター柏支所、情報基盤センター、生産技術研究所附属大規模実験高度解析推進基盤、柏図書館、文書館など、さまざまな部局が活動しており、物質、生命、情報や技術、あるいは、地球、そして、遙か彼方の宇宙まで、幅広い学際研究が日々繰り広げられています。

さて、現代は新型コロナウイルス感染症や気候変動など、私たち人類社会の目の前に地球規模の課題が突きつけられている時代であると言ってよいと思います。本年2月に突如起こった軍事侵攻を例に挙げるまでもなく、これまで前提としていた諸条件や常識が大きく変化しつつある今日だからこそ、私たちはアカデミアとして過去・未来の長期を見渡す視野に立ち、大学が果たすべき役割をしっかりと意識しつつ、新しい社会の構築に取り組みなければならない、と考えています。このような考え方にに基づき、昨年9月には東京大学の新たな基本方針であるUTokyo Compassを公表し、世界の公共性に奉仕する総合大学として、優れた多様な人材の輩出と、人類が直面するさまざまな地球規模の課題解決に向け、具体的な取り組みを進めつつあります。

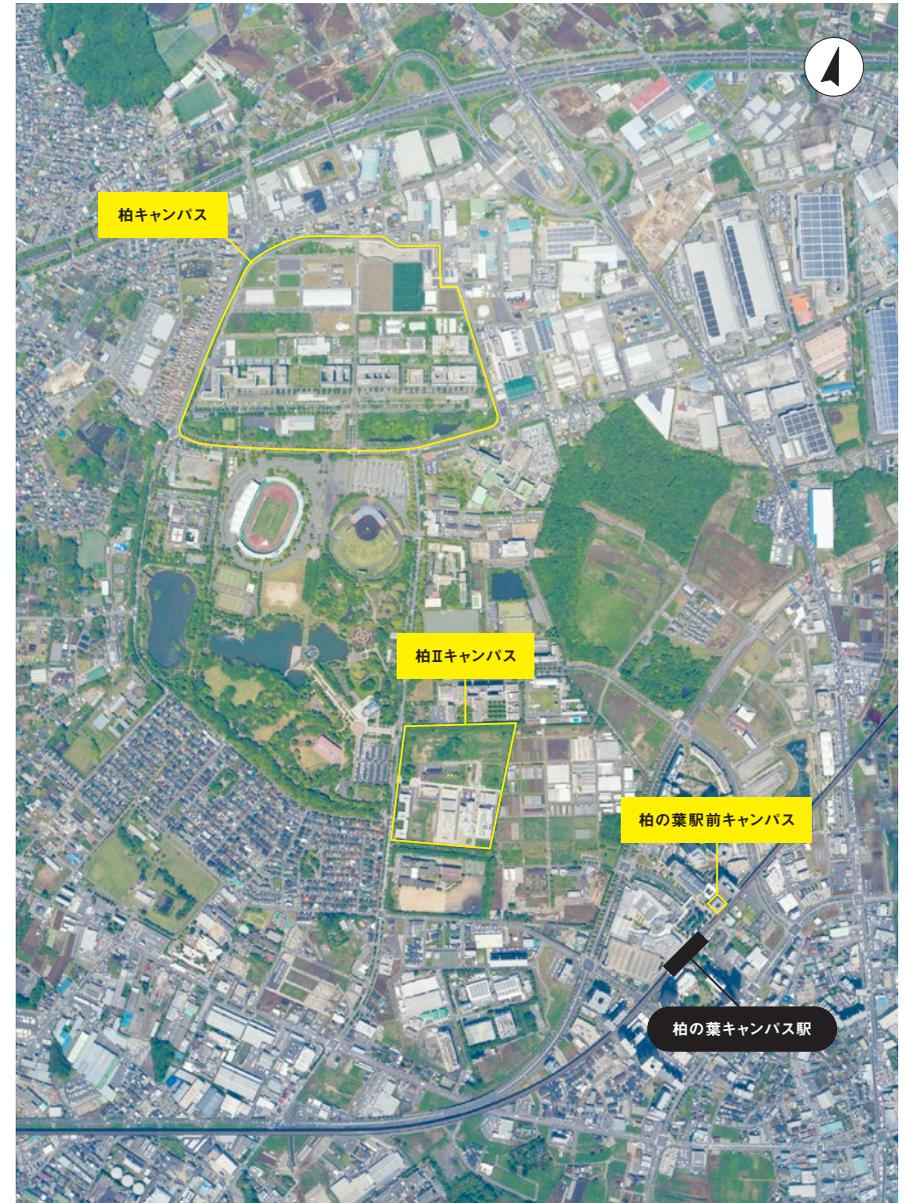
このたび土地取得が完了した柏キャンパスにおいては、学融合を志向した「知の冒険」、国際キャンパスとしての特徴を活かした多様な次世代リーダーの育成、「次世代環境都市」を目指した地域との対話による連携などが進んでおり、UTokyo Compassの視点を強力に推し進めています。これからも、柏キャンパスのみなさんが創造的な挑戦の先頭に立ち、世界の公共性に奉仕する大学としての教育・研究活動に、引き続き貢献してくださることを大いに期待し、私からの挨拶といたします。

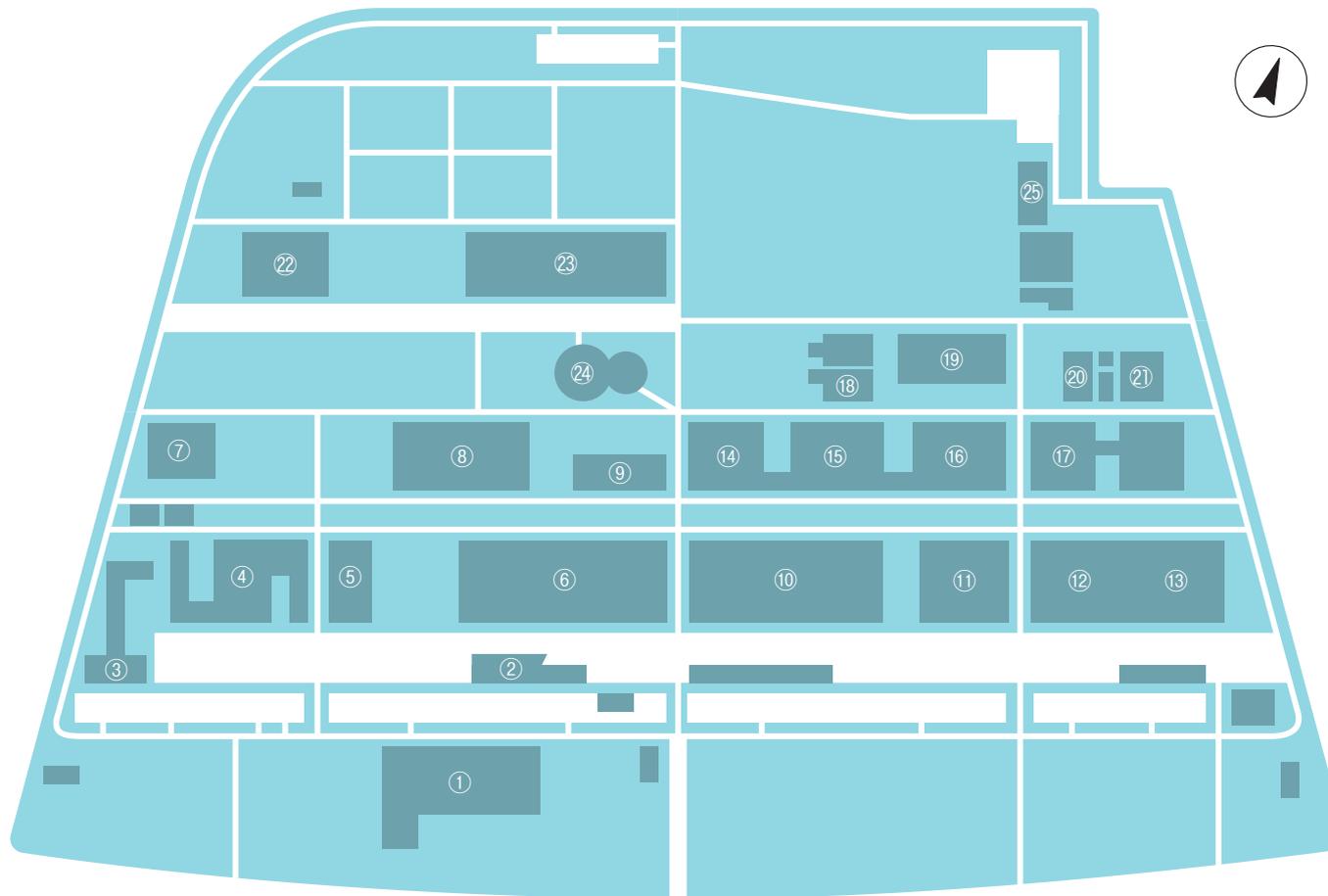
令和4年(2022年)7月4日

東京大学総長 藤井輝夫

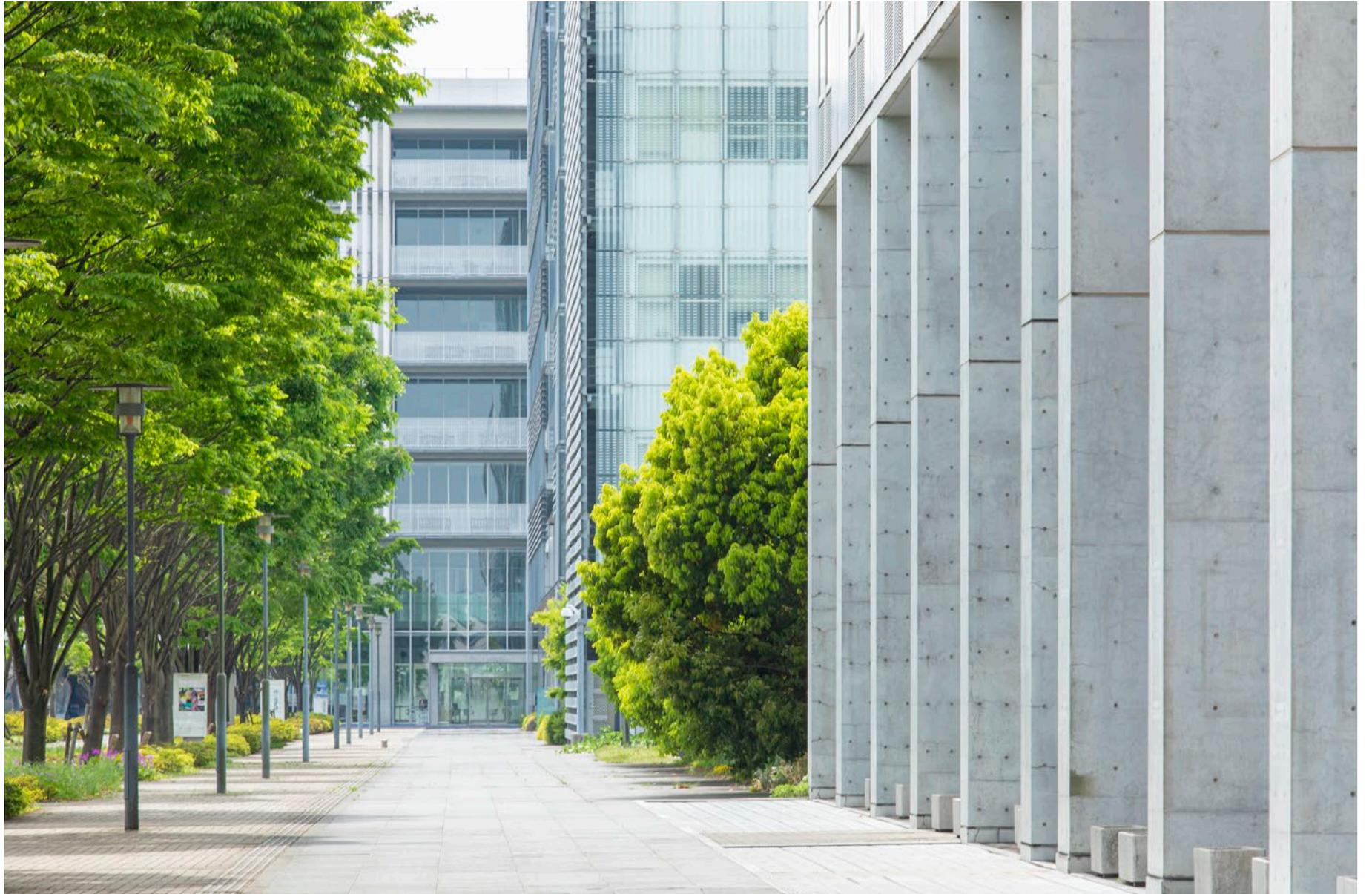
柏の葉キャンパス駅と 東京大学の3つのキャンパス

つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅を最寄駅とする柏地区には、柏キャンパス、柏IIキャンパス、柏の葉駅前キャンパスの3つの東大キャンパスがあります。柏の葉キャンパス駅と3つの東大キャンパスは、この俯瞰図のような位置関係になっています。このうち、メインキャンパスである柏キャンパスの最後の取得予定地が2021年に取得され、この度、二十数年におよぶ柏キャンパスの整備が完了しました。





- | | | | | |
|-----------|-----------------|------------------------|-----------------------|------------------------------------|
| ① 柏図書館 | ⑦ 大海研海洋観測機器棟 | ⑬ 総合研究棟 | ⑱ 物性研ロングパルス強磁場
実験棟 | ㉓ 生産技術研究所研究実験棟I |
| ② 柏保健センター | ⑧ 新領域基盤科学実験棟 | ⑭ 物性研低温・多重極限実験棟 | ⑲ 物性研極限光科学実験棟 | ㉔ 生研テンセグリティ構造モデル
スペース／ホワイトライノII |
| ③ 大気海洋研究所 | ⑨ 環境安全研究センター柏支所 | ⑮ 物性研ショートパルス強磁場
実験棟 | ⑳ 共同利用棟 | ㉕ 東京大学 丸和 柏FUSION
フィールド |
| ④ 新領域環境棟 | ⑩ 物性研究所 | ⑯ 物性研先端分光実験棟 | ㉑ 新領域情報生命科学実験棟 | |
| ⑤ 新領域生命棟 | ⑪ カブリ数物連携宇宙研究機構 | ⑰ 第2総合研究棟 | ㉒ 生産技術研究所研究実験棟II | |
| ⑥ 新領域基盤棟 | ⑫ 宇宙線研究所 | | | |



ゼロからの柏キャンパス整備史

二十数年の年月を費やして創り上げた「知の冒険」のフィールド

東京大学柏キャンパス整備の物語は1996年の最初の土地取得から始まります。以後、本学は二十数年の年月を費やして「知の冒険」のフィールドを創り上げてきました。そのキャンパス整備の歴史を駆け足で紹介いたします。

本郷、駒場に次ぐ第三の主要キャンパスを……。 「六本木、田無、中野などに点在する(本郷、駒場以外の)キャンパスにある部局を集約して新キャンパスをつくる」という構想で柏キャンパスの整備は始まりました。1992年、吉川弘之総長のもと、本学のキャンパス全体を「三極構造」と捉える新キャンパス構想が策定され、その後「ディシプリン追究型の本郷」、「インターディシプリナリー型の駒場」、「トランスディシプリナリー型の柏」というコンセプトが明確に定められました。ディシプリン追究型とは伝統的学問領域を軸とするスタイル。インターディシプリナリー型とは分野を隣接的に配置する「空間的総合」によって学際的な研究成果を生み出すスタイル。トランスディシプリナリー型とは学問分野の形成過程を明示する「時間的総合」によって学融合を実現するスタイルを指しています。柏キャンパスはこの「学融合」の精神によって、細分化された学問諸分野を時間的に遡って大胆に組み替えることも視野に入れた「知の冒険」を進めていく場として、構築されていくことになります。さらに、柏キャンパスでは「4つのネットワーク志向」を方針とすることとなりました。4つのネットワークとは、国際化を促す「グローバルなネットワーク」、全国共同利用研究所を有する「全国レベルのネットワーク」、千葉県や柏市と連携する「地域レベルのネットワーク」、本郷・駒場・柏の各キャンパスの連携による「大学レベルのネットワーク」という異なる階層のネットワークを意味します。

順次、部局が移転。さらに新部局が設立

1996年に第一期の土地取得(約11.6ha)が実施され、1999年に第二期の土地取得(約12.1ha)が実施されました。以後、この第一期・第二期の土地に各キャンパスから徐々に部局が移転してきます。

最初の部局移転は2000年。六本木キャンパス(当時)から物性研究所(以下、物性研)が、田無キャンパスから宇宙線研究所(以下、宇宙線研)が、それぞれ移転してきました。また、同年、保健センター柏健康相談室(後の柏保健センター)が設置されました。後年、数千人の入場者を記録するようになる「柏キャンパス一般公開」は、この年から始まっています。以後、地域とのコミュニケーション(地域レベルのネットワーク)は柏キャンパスの大きな特徴となっていきます。

2001年、新領域創成科学研究科生命科学研究系が本郷キャンパスから移転してきました。新領域創成科学研究科(以下、新領域)は「学融合」を促進する新部局として1998年に設置が決まり、移転までの間は本郷キャンパスで運営されていました。2003年に環境安全研究センター柏支所が設置されました。2004年には新領域基盤科学研究系が柏キャンパスに移転。さらに同年、柏図書館が開館しています(部分開館。正式開館は2005年)。ここに設置された自動書庫は当時、学内の他の図書館にはなかった最新の書籍出納システムでした。巨大な書籍ラックの間をスタッカークレーンが猛スピードで動き、目的の書籍を取り出してくるのです。

そして2005年。この年は4つの全学センター、人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、高温プラズマ研究センター、気候システム研究センターが相次いで移転してきました。人工物工学研究センターはこの時から2019年まで柏キャンパスで運営された後、現在は工学系研究科の一部となっています。高温プラズマ研究センターは現在、新領域の一部となっています。気候システム研究センターは、海洋研究所と統合し、大気海洋研究所となりました。

2006年には新領域環境学研究系が柏キャンパスに移転し、「新領域の全移転」が完了しました。完了記念式典も開催され、式典の様子はライブ中継されて学内のどの端末からも観ることを可能にしました。現在のオンラインによるDX化を連想させる話です。2007年には、文部科学省世界トップレベル研究拠点(WPI拠点)である数物連携宇宙研究機構(IPMU)が設立されました。数物連携宇宙研究機構は2012年に米国カブリ財団の寄附を受け、カブリ数物連携宇宙研究機構(以下、Kavli IPMU)と改称されました。

柏の葉国際キャンパスタウン構想による街とキャンパスの変貌

2008年には地域との連携が強化され、東大、千葉大、柏市、千葉県との4者によって「柏の葉国際キャンパスタウン構想」が策定されます。本学と千葉大学を始めとする柏の葉キャンパス駅周辺の学術研究機関をコアとして、街全体を「新たな社会実験の場」とする試みがスタートしました。その社会実験の一例として、新領域で研究・開発された『オンデマンド交通システム』実証実験が2008年から実施されました。これは路線バスのような経路や時刻表を決めず、利用者が希望乗降地と乗車時刻を予約し、その予約内容によって成立した経路を運行するシステムで、バスとタクシーで実施されました。

2009年、海洋研究所が中野キャンパスから移転してきます。そして、翌2010年、気候システム研究センターと統合し、大気海洋研究所(以下、大海研)となりました。

2011年、第三期の土地取得(約7.6ha)が実施されました。また同年、情報基盤センターの一部と高齢社会総合研究機構の一部が移転してきました。高齢社会総合研究機構はすでに2009年から柏市豊四季台地域において「長寿社会のまちづくりモデルの構築」というプロジェクトを実施していました(地域レベルのネットワーク)。2012年には、柏キャンパスの5部局(新領域、物性研、大海研、宇宙線研、Kavli IPMU)に

よる『柏キャンパス in 駒場』というイベントが始まります。駒場キャンパスの学部1・2年生に対して、柏キャンパスで研究されているサイエンスを紹介するイベントです。駒場の学部1・2年生にとって、大学院生以上の人々が活動する柏キャンパスは本郷キャンパスよりも遠い存在であり、この距離を少しでも縮めようという試みでした(大学レベルのネットワーク)。

2014年、文書館柏分館が設置されました。文書館は本学にとって重要な「法人文書および本学の歴史に関する資料等」を管理・保存・利用するための施設です。この柏分館の設置によって、現在は、文書・資料が本郷本館と柏分館に分けて保存されています。2017年、本学西千葉キャンパス(当時・千葉市稲毛区)にあった生産技術研究所(以下、生研)の千葉実験所が柏キャンパスに移転し、2020年に生産技術研究所附属大規模実験高度解析推進基盤に改組されました。様々な実験施設を有する柏キャンパス生研エリアは、まるで工学実験のワンダーランドのようになっています。2019年には、生研と新領域が参画している柏ITS推進協議会によって、柏の葉キャンパス駅と柏キャンパスの間で「自動運転バス長期営業運行実証実験」が始まりました。上述したオンデマンド交通システム(2008年)から続く「新しい公共交通」の実証実験は発展を続けています。

「知の冒険」のフィールド、柏キャンパスが完成

2021年、第四期の土地取得(約5.3ha)が実施され、「柏キャンパスの全土地取得(約36.6ha)」がついに完了しました。第四期で取得された土地には、「東京大学 丸和柏FUSIONフィールド」が設置されています。一見、普通のラグビーグラウンドに見えるこのフィールドは、ラグビーの試合や練習に使用するだけでなく、本学スポーツ先端科学連携研究機構(UTSSI)と(株)丸和運輸機関の共同研究契約に基づき、フィールドにハイテクセンサーを配置して解析・研究を可能にする計測フィールドの機能も併せ持っているのです。

二十数年を費やして創られてきた「知の冒険」のフィールド、柏キャンパス。これからも、いくつもの階層のネットワークによって相乗効果を備えたこのキャンパスから、新たな「知」が産み出されていくことでしょう。



2002年撮影



2022年撮影

柏キャンパス整備史 — 拡張する学融合空間

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 1996年 | 第一期土地取得完了(南東側・約11.6ha)。 | 2008年 | 柏の葉国際キャンパスタウン構想を策定。 |
| 1999年 | 第二期土地取得完了(南西側・約12.1ha)。 | 2009年 | 海洋研が移転(翌2010年に大気海洋研に改組)。 |
| 2000年 | 物性研と宇宙線研が移転。柏保健センターを設置。 | 2011年 | 第三期土地取得完了(北西側・約7.6ha)。
情報基盤センターの一部と高齢社会総合研究機構の一部が移転。 |
| 2001年 | 新領域生命科学研究系が移転。 | 2014年 | 文書館柏分館を設置。 |
| 2003年 | 環境安全研究センター柏支所を設置。 | 2017年 | 生研附属千葉実験所が移転。
(2020年に生研附属大規模実験高度解析推進基盤に改組) |
| 2004年 | 新領域基盤科学研究系が移転。柏図書館を設置(正式開館は2005年)。 | 2021年 | 第四期土地取得(北東側・約5.3ha)を完了し、
柏キャンパスのすべての土地取得を完了。 |
| 2005年 | 人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、
高温プラズマ研究センター、気候システム研究センターが移転。 | 2022年 | 東京大学 丸和 柏FUSIONフィールドを設置。 |
| 2006年 | 新領域環境学研究系が移転。 | | |
| 2007年 | IPMU(後のKavli IPMU)を設立。 | | |

1999~2000年

第一期(1996年)、第二期(1999年)で取得した土地は、柏キャンパス成立のベースとなる土地でした。

最初に移転してきた部局は物性研究所と宇宙線研究所。

宇宙線研究所の建物の一部はスーパーカミオカンデの巨大水槽をモチーフとした造りになっています。



物性研究所

新しい物質を創成し、その特性を調べ、その謎を理論・計算で解き明かす

1957年に全国共同利用研究所として設立された物性研究所(以下、物性研)は約40年以上、六本木キャンパスで活動した後、2000年に柏キャンパスに移転してきました。物性研はその創設時から一貫して、実験と理論の研究者が協力して、先端物性科学を推進しています。新しい物質・システムを創り、その特性を先端計測・制御し、新現象や機能のメカニズムを理論や計算シミュレーションで解き明かし、その結果からより高度な物質の設計指針を導き出すという正のスパイラルで、新しい学術を生み出しています。物性研の最大の特徴はいくつもの中・大型の実験装置・施設を備えていること。室内発生世界の超強磁場を作り出す施設、超低温や超高圧の極限環境を作り出す施設、世界のエネルギー分解能を有する極限レーザー分光、そして放射光、中性子などの先鋭的量子ビームやスーパーコンピュータ。これらを横断的に活用できる環境があり、所内外の全国の物性研究者に開かれています。そして、もうひとつの大きな特徴は、人材育成。最先端の研究現場と直結した大学院教育に加え、人材循環のため多くの若手研究者を国内外の研究機関や企業へ輩出しています。また次世代教育・ネットワーキングとして、柏キャンパスの他の部局と連携し、女子中高生や女子学生・院生のためのイベン

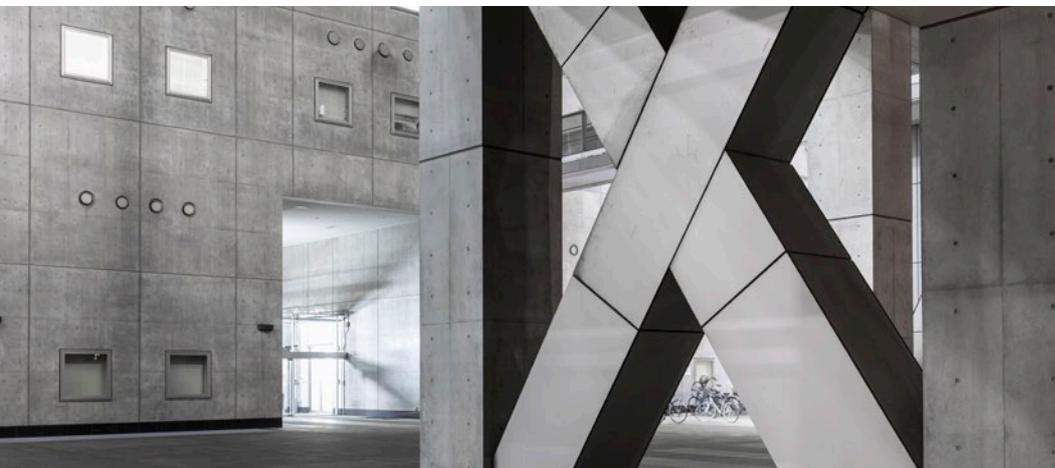
トを開催しています。最先端の研究拠点として、研究、人材育成、共同利用・共同研究を主要軸に活動しています。



宇宙線研究所

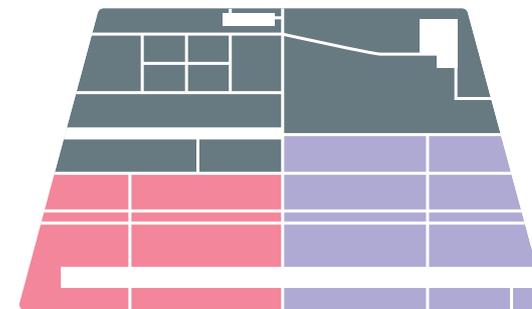
幅広い宇宙線の観測によって、宇宙と素粒子の根源的な研究を行う

1953年に乗鞍岳に建設された宇宙線観測所を前身とする宇宙線研究所は、1976年、旧原子核研究所の一部と統合され、全国共同利用研究所として設立されました。田無キャンパスで長く運営された後、2000年に柏キャンパスに移転してきました。宇宙からやってくる高エネルギーの粒子「宇宙線」を研究するこの研究所は、スーパーカミオカンデのある神岡宇宙素粒子研究施設、KAGRAのある重力波観測研究施設(以上、岐阜県飛騨市)、乗鞍観測所(乗鞍岳)、明野観測所(山梨県の明野高原)、カナリア高エネルギー宇宙物理観測研究施設(スペイン・カナリア諸島)と国内に4つ、海外に1つの研究施設を持ち、米国ユタ州、チベット、南米ボリビアでも巨大な観測施設を運営しています。この柏キャンパスを拠点としつつ、観測は世界中で行われているのです。特に有名なのはスーパーカミオカンデ。地下1000メートルの山中に設置された巨大な水槽であるこの実験装置によって素粒子ニュートリノに質量があること(「大気ニュートリノ振動の発見」)が実証され、その研究を主導した梶田隆章博士(前所長)に2015年ノーベル物理学賞が授与されました。さらに宇宙の大きな謎に迫るため、ハイパーカミオカンデの建設が進行中です。



2001～2007年

この時期は毎年、次々に部局が移転し、IPMUのように最初から柏キャンパスに設立される部局も登場してきます。そして、2007年頃には、「知の冒険」のフィールド、柏キャンパスの基本的な「かたち」が創り上げられました。



新領域創成科学研究科



学融合を実現し、新しい学術領域を創り出す大学院

新領域創成科学研究科(以下、新領域)は柏キャンパスの理念である「学融合」を実現し、新しい学術領域を創り出すことを目指して1998年に設立された大学院です。2001年に生命科学研究系が、2004年に基盤科学研究系が、2006年に環境学研究系がそれぞれ柏キャンパスに移転しました。学融合という理念のもと、ナノ、物質・材料、エネルギー、情報、複雑系、生命、医療、環境、国際協力などの「従来の伝統的な分野では扱いきれない学術課題」に挑戦しています。また、学融合の理念は研究のみならず教育にも生かされ、柏キャンパス内の他部局(物性研、宇宙線研、大海研、Kavli IPMU)との連携によるサステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム(GPSS-GLI)、全学的な東京大学スマートシティスクールなど、数々の横断的教育プログラムが実施されています。さらに新領域は、柏の葉国際キャンパスタウン構想による地域の様々な社会実験に参画してきました。2008年に新領域が研究・開発した『オンデマンド交通システム』の実証実験は、その後、生研を始めとする学内各部局との連携により「自動運転バス長期営業運行実証実験」に発展しています。学融合を実践するための大学院として設立された新領域創成科学研究科。「知の冒険」はこれからも新たな展開に向けて続いていきます。

柏図書館

学内で初めて自動書庫を設置した図書館

柏図書館は2005年に開館しました。本をコンテナに収めて機械が出入庫する学内初の自動書庫に、自然科学系雑誌40万冊を所蔵します。コミュニティサロンやメディアホール等の施設も備え、地域との連携にも取り組む開かれた図書館です。



空間情報科学研究センター

「空間情報科学」という新しい学術分野を創り出す



空間情報科学研究センターは、空間的な要因と結びついた現象や社会問題を解明・解決するための新しい学術分野、「空間情報科学」を研究する全国共同利用施設です。1998年に設立され、2005年に駒場キャンパスから柏キャンパスに移転してきました。

国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構

宇宙に関する疑問を数学、物理学、天文学で解明する

カブリ数物連携宇宙研究機構(以下、Kavli IPMU)は、2007年に文部科学省世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)に採択され、数物連携宇宙研究機構(IPMU)の名称で東京大学を宿主機関として柏キャンパスに設立されました。その後、2012年に米国カブリ財団の寄附を受けて現在の名称へ改称しました。Kavli IPMUでは、「宇宙はどのように始まったのか。宇宙は何でできているのか。宇宙の基本法則は何か。宇宙の今後の運命はどうなるのか。この宇宙になぜ我々は存在するのか」といった宇宙の根源的な疑問を解明すべく、世界中から集まった数学者、理論物理学者、実験物理学者、天文学者が連携して研究を行なっています。ほぼ半数が外国人研究者で、非常に国際的な研究環境です。そのような旺盛な研究活動のシンボルと言えるのが「黒板」です。Kavli IPMU 研究棟には、研究者たちがどこにいてもすぐにディスカッションを始められるように、そこかしこに黒板が置かれています。実際、黒板での議論をきっかけに分野を超えた様々な融合研究の世界的成果が生まれてきました。どこまでも謎をはらむ宇宙に関して、研究者たちの日々の議論は現在でも尽きることなく続いています。

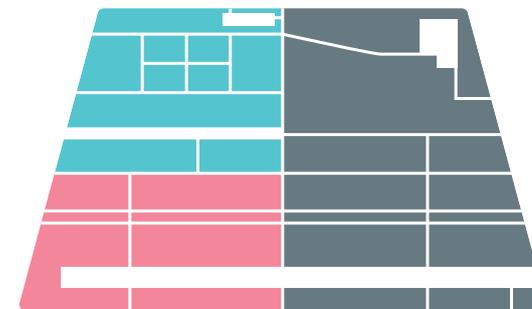


2009~2017年

2011年に第三期土地取得が完了。

2017年に生産技術研究所附属千葉実験所が柏キャンパスに移転し、部局移転はほぼ完了します。

知の冒険者たちはついに柏キャンパスに集結しました。未来に向けての新たな冒険が展開していきます。



大気海洋研究所

海と大気に関するあらゆる研究を推し進めていく

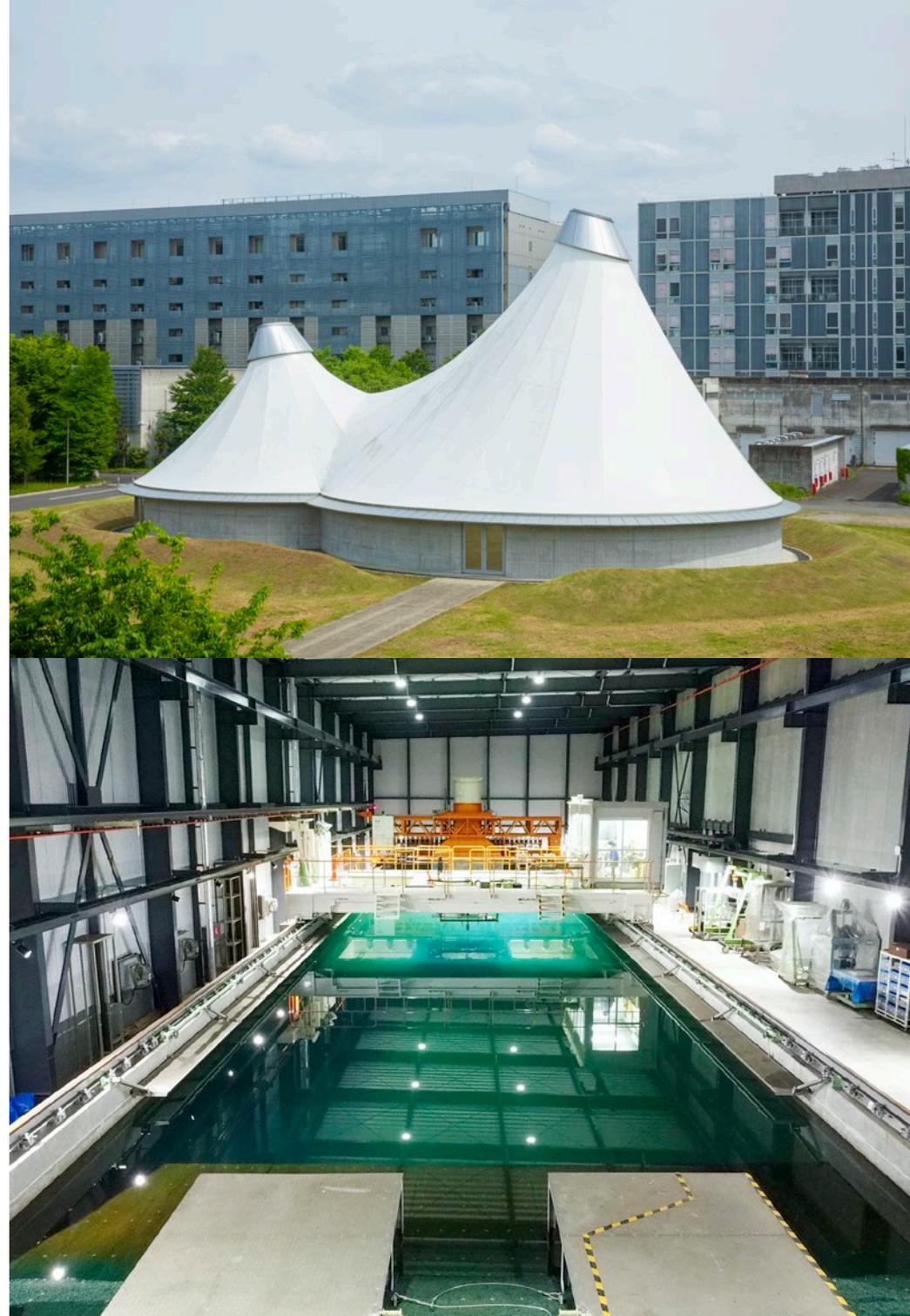
1962年に設立された海洋研究所は、2009年に中野キャンパスから柏キャンパスに移転し、2010年に気候システム研究センターと統合し、大気海洋研究所（以下、大海研）となりました。大海研では、海洋と大気の変動メカニズム、海洋生物に関する基礎的研究、地球環境の変動など、海と大気に関する幅広い研究が行われており、地球表層圏に関する科学の深化を通じた社会貢献を目指しています。また、現在、世界的な課題となっている地球温暖化問題への対応においても重要な知見を生み出しています。国際・地域連携研究センター（大槌研究拠点）と学術研究船『白鵬丸』『新青丸』を有し、実際に沿岸および洋上での観測や実験を続けています。大槌研究拠点（旧国際沿岸海洋研究センター）は2011年の東日本大震災において甚大な津波被害を受けましたが、2018年に新たな研究実験棟が再建されました。さらに、教育面においては、本学の大学院と連携して大学院教育を行なっています。春と夏に学部生向けの『大気海洋科学インターンシップ』を実施し、女子中高生への理系進学支援イベントも開催しています。大海研は全国共同利用・共同研究拠点に指定されており、全国の研究者にも開かれた存在となっています。



生産技術研究所附属大規模実験高度解析推進基盤

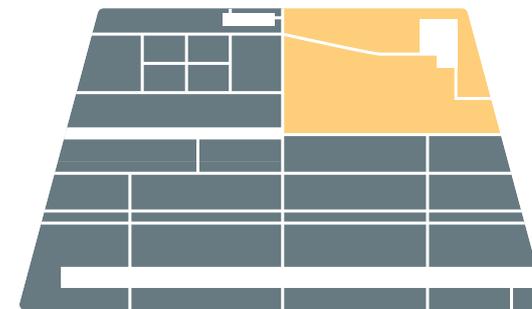
実践的なシミュレーションを可能とする工学実験ワンダーランド

生産技術研究所附属千葉実験所は、長らく西千葉キャンパス(千葉市稲毛区)にありましたが、2017年に柏キャンパスへ機能移転し、その後、2020年、生産技術研究所附属大規模実験高度解析推進基盤(以下、基盤)に改組されました。基盤では、大規模かつ実践的な工学実験が行われています。公道を模した実験用道路と信号機、列車実験用のレール、画期的な建築工法によるモデルハウス(ホワイトライノII)、水流実験のための海洋工学水槽、大型振動台などによって、大規模工学実験を行うことが可能となっています。そのような実験の結果に高度データ解析やモデリングを融合することによって、総合的・革新的な研究成果が生み出されます。現在、5研究室が常駐し、約30研究室が柏キャンパスにて研究活動中。毎年開催される柏キャンパス一般公開では、まるで工学実験のワンダーランドのような研究所が人気の的となっています。まさに、「知の冒険」に相応しい実験場と言えます。



2021～2022年

柏キャンパスの最後の取得予定地(約5.3ha)は、2021年に取得されました。これによって、柏キャンパス全体の土地取得(約36.6ha)が完了しました。2022年、ここに「東京大学 丸和 柏FUSIONフィールド」が設置されました。



東京大学 丸和 柏FUSIONフィールド

最後の取得地に設置されたのは実験機能を併せ持つラグビーグラウンド

東京大学では全学的にFUSIONフィールド構想を推進しており、この構想は駒場、本郷、柏の3つのキャンパスの運動施設にハイテクセンサーを備え付け、各種運動施設を全面的に計測フィールド化するというものです。3つのキャンパスの先陣をきって、柏キャンパスに「東京大学 丸和 柏FUSIONフィールド」が設置されました。本フィールドでは、

本学スポーツ先端科学連携研究機構(UTSSI)と(株)丸和運輸機関との共同研究契約に基づいた、ラグビーチームの強化に向けた科学的支援と実証研究が展開され、その成果が広く社会に応用されていくことが期待されています。



未来はこの場所の向こうにある



東京大学柏キャンパス
千葉県柏市柏の葉5-1-5

構成部局等：

新領域創成科学研究科

宇宙線研究所

物性研究所

大気海洋研究所

空間情報科学研究センター

情報基盤センター

国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構

生産技術研究所附属大規模実験高度解析推進基盤

柏図書館

文書館(柏分館)

環境安全研究センター柏支所

保健・健康推進本部(柏保健センター)

国際化教育支援室 柏支部

高齢社会総合研究機構

東京大学柏キャンパス ―― 「知の冒険」を目指して

2022年6月30日発行

Director：藤井輝夫

Coodinators：吉田博之・佐藤哲康・金光謙一郎・小川友明・小澤みどり・渋谷 哲・佐藤典明・石津守康・鶴添長生・小林豊輝・関谷 孝・奥抜義弘

Editor / Writer：清水 修 (ACADEMIC GROOVE MOVEMENT)

Designers：古田雅美・内田ゆか (opportune design inc.)

東京大学総務部、財務部、施設部、資産活用推進部、柏地区共通事務センター

113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

<https://www.u-tokyo.ac.jp>

